年神さんの時間

野元　正

大晦日の夕方、家族そろって歳餅を食べる。

おめでとう、と言って一つずつ歳をとる我が家の行事はいつの間にかなくなってしまった。いつごろからやめてしまったのか記憶にない。子供たちが成長し、高等学校へ行きだしたころからだったろうか。受験勉強などに追われて、忙しそうにしている子供たちの様子に正月などを迎える気分ではないらしい、と妙な気を遣って、私も妻も何となく家族の大切な行事を忘れたふりをしていたような気がする。

子供のころの私は、大晦日が大好きだった。

朝から祖母と母の指図に従って、玄関や靴箱や庭の掃除、学習机や教科書の整理整頓など、年子の弟と喧嘩しながら進める。

「年神さんが見ていらしゃるからね。ちゃんとしないと、懲らしめられるわよ」

と母が遠くで言っている。父は私たち兄弟の小さいときに亡くなっていたから、母の声は父の声でもあった。

祖母と母は手分けして、煮しめ、酢の物、焼き物、黒豆、数の子、田作りなどおせち料理を作りながら夕食の膳の用意もしている。

円い卓袱台に箸や取り皿を並べたりするのは、私たち兄弟の受け持ちだった。四角い皿に庭で採ってきた譲り葉を敷き、祖母が焼いてくれた餅とつきたての生餅を盛りつける。弟の餅の方が大きく見え、隙をみてそっと取り替えたりもした。

やがて、年越し蕎麦の美味しそうな湯気の匂いがしてくる。祖母と母は白い割烹着を脱ぎ、私たち兄弟に静かに座るように言う。

「おめでとう。みんなひとつ歳を取りましたね。何もないけどお食べ」

祖母は卓袱台の上を見回しながら言った。

まだ軟らかい生餅から先に食べる。

焼いた餅と違った味がした。ほんの少し滞るようなのど越しもあまり経験したことがない。大晦日だけの珍しい食べ物に思えた。

「歳餅を食べたら、来年の目標を年神さんにお誓いするの。頑張りますって……」母が私と弟を見つめ、「あっ、それから今晩、年神さんにお願いすれば、いい子にもなれるのよ」

と続ける。

私も弟もとても高い澄んだ声で、「はい」と良い返事をした。内心できるかな、と不安が過ぎる。勉強ができると、母も祖母も小学校の先生も、ちやほやしてくれるように思えたから、クラスで一番になることを、とてもあさましいこととも思わずに密かに願った。

大晦日で嬉しいことは、除夜の鐘がなり、新年になっても、母が、早く寝なさい、と言わないことだった。

台所はまだ湯気が立ち込めている。

そのころ、私は早く大人になって、夜更かしをしたいと思っていたから、ひとつ歳を取ったことで興奮していた。

「除夜の鐘から元旦の朝までの間はね、年神さんがいらしゃる時間なの。起きていてお迎えしようね」と母から大人と同じ扱いを受けて心が浮き立った。

母の目を覗き込むように訊ねる。

「願えば、ホントにいい子になれるの？」

「願うばかりではだめよ。何でも実行しなきゃ、逆に年神さんに懲らしめられるわよ」

母の目に厳しさが宿り、心が引き締まる。

あれから何年経っただろう。

いつの間にか年神さんを迎える新鮮な心も無垢な気持ちも忘れてしまい、年ふる毎に色褪せ、退化し、無意識に捨ててしまった。

でも、現代の混沌とした世に生きていると時折、この失ってしまった瑞々しい心を無性に取り戻したいとあがいている自分の影に気づく。そして、どうにかしなければ、と思いつつまた時が過ぎるのだ。